

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に



CREATOR^{NO} INTERVIEW 144

松下徹 (SIDE CORE) Toru Matsushita
高須咲恵 (SIDE CORE) Sakie Takasu
西広太志 (SIDE CORE) Taishi Nishihiro

2012年に高須咲恵と松下徹により活動を開始し、2017年に西広太志が加入する。「風景にノイズを起こす」をテーマに、ストリート・カルチャーの視点から公共空間を舞台にしたプロジェクトを展開。展示会の企画を主な活動としながら、作品を街中に点在させて建築や壁画、グラフィティを鑑賞しながら街を巡る「MIDNIGHT WALK tour」を開催、都心湾岸沿いでスタジオ兼プロジェクトスペースのランニングなど、多彩な活動を行う。

No
144 SIDE CORE アーティストユニット
SIDE CORE / Artist Unit

街の隙間で、瞬間的な作品を。

published_2023.01.25 / photo_tada / text_ikuko hyodo

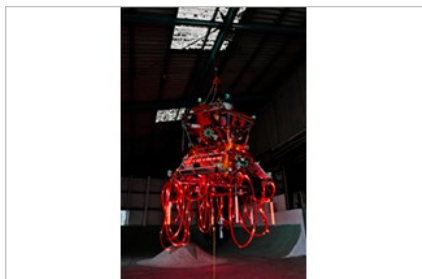
(画像左から)松下徹さん、高須咲恵さん、西広太志さんによるアーティストユニット、SIDE CORE は、ストリートカルチャーをベースに、都市や地域とのつながりを視覚化する作品を創り続けています。そんな彼らが、街にどうコミットしてきたのか。そしてコロナ禍を経た現在の街を、どう見ているのか。森美術館で開催中の『六本木クロッシング 2022 展：往来オーライ!』の参加作品や、これまでのプロジェクトを振り返りながら、語っていただきました。

夜間工事の現場から見えてくる、街の構造。

松下徹 『六本木クロッシング 2022 展：往来オーライ!』に出品している《rode work ver. tokyo》は、ふたつの要素から構成された作品です。ひとつは夜間の道路工事現場の照明を使ってつくった立体作品。そしてもうひとつは、工事作業員の格好をしたスケートボーダーが、東京の夜の街を滑っている映像作品。制作の背景として、まずは夜間工事の現場に対する興味が根底にありました。

日本の場合、照明や人員配置などのレギュレーションが厳しくて、独特な雰囲気になってます。特に東日本大震災後、僕たちの見ている限りでは道路工事用品の種類がすごく増えました。その中で特に面白かったのが、「仙台銘板」という会社の照明機材で、照明のカウントがシンクロするようになっていました。これは電波時計と似た仕組みなのですが、東日本では福島にある送信所からの電波が標準とされていて、さまざまな現場の光がそれに合わせて点滅します。作品には、実際のレンタル照明を使用しているので、展示後、それらはまた街に還っていく。街で偶然この機材を見かけた人が、僕たちの作品を美術館で見たことを思い出すかもしれない。街とのつながりを保った作品であることも、特徴のひとつです。

映像に関しては、ひとつの作品の中でオリンピック前後の東京を対比させています。まずは再開発真っ只中の 2018 年の風景、そして、オリンピックやコロナ禍を経た 2022 年の風景。それらを背景に、作業服を着たスケートボーダーがパフォーマンスを繰り広げます。



六本木クロッシング2022展：往来オーライ！

森美術館が3年に一度、共同キュレーション形式で開催してきた、日本の現代アートシーンを総覧する定点観測的な展覧会。第7回目の今回は、1940年代～1990年代生まれの日本のアーティスト22組の作品約120点を紹介。サブタイトルの「往来オーライ！」には、異文化との交流や人の往来の歴史を経て、日本には多様な人・文化が共存している事実を再認識し、コロナ禍により途絶えてしまった人々の往来を取り戻したいという思いが込められている。

2022年12月1日(木)～2023年3月26日(日)開催。

撮影：後藤秀二

画像提供：リボンアート・フェスティバル2017(宮城)



rode work ver. tokyo

夜間工事用の照明機材を利用してつくられた立体作品と、作業服を着たスケーターたちが街中や工事現場を模したスケートパークでパフォーマンスをする映像作品で構成されている。匿名のアーティスト集団、EVERYDAY HOLIDAY SQUADが制作。映像作品は、六本木アートナイト(2018)でも展示されていた作品の最新バージョン。

SIDE CORE / EVERYDAY HOLIDAY SQUAD

《rode work ver. tokyo》

2018／2022 年

展示風景：「六本木クロッシング 2022 展：往来オーライ！」森美術館(東京)2022-2023 年

撮影：木奥恵三



published_2023.01.25 / photo_tada / text_ikuko hyodo

変幻自在なストリートカルチャーの可能性。

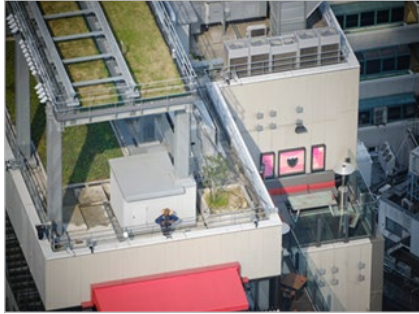
松下 僕自身、ストリートアートに惹かれるのは、美術館のように特別な空間でなくても気軽にアートに触れられるし、鑑賞の自由さがあるから。パブリックアートや壁画なんかもそうですよね。しかもどんどん変化し、昨日あったものが今日はなくなったり、逆にちょっとした落書きみたいなものが10年、20年と時を超えて残っていたりする。僕たちのプロジェクトは室内で展開するものも多いのですが、街の風景の中で鑑賞者がいきなり作品に遭遇するところに面白さがあると思っていて、美術館やギャラリーの外で活動することもとても大切にしています。

高須咲恵 私は、ストリートカルチャーのあまり偉そうじゃないところが好きですね。パブリックアートやモニュメンタルな銅像は、街の一部としてきっちり計画されることが多いのに対し、ストリートカルチャーは誰に対してもオープンだし、もっとフラジャイルに変化していく。その自由さが好きです。美術作品の場合、耐久性が100年以上ないと作品としてどうなのか、みたいな議論に囚われがちですが、ストリートカルチャーにはそれと逆行するような性格があるので、どう向き合うべきかを考え続けることができますよね。

アクションで街をアップデートしていくプロジェクト。

松下 グラフィティは、もともとは落書きというありふれたものに形式を与えて、世界中の都市を塗り替えていることがすごいと思うんです。僕らの活動も、作品を通じて新しい視点を獲得し、行動を起こすことで、身近な街の風景をアップデートしていければと思っています。

西広太志 『DOWN TO TOWN』という展覧会で渋谷の地図をつくったのですが、渋谷は特に再開発が盛んなので、制作して数ヶ月後には地図で取り上げている物がなくなってしまうほどのです。



DOWN TO TOWN

渋谷スクランブルスクエア46階にある屋内展望回廊「SKY GALLERY」で、SIDE COREがキュレーションしたEVERYDAY HOLIDAY SQUADの個展。「視点を広げる」をテーマに掲げたSKY GALLERYから、過去や現在という時間の流れにフォーカスしつつ、渋谷の街を重層的に捉える試み。地図をテーマに絵画や近隣ビルに設置した作品をのぞく望遠鏡などが展示された。2022年5月20日～7月24日開催。

写真：望遠鏡で覗いたネズミ

撮影：三嶋一路

松下 《golden city》も同じくアップデートされ続けるプロジェクトです。建物のオーナーに金箔のネズミの彫刻を寄贈する代わりに、敷地のどこかにそれを置いてもらう。通貨を介さずに、作品と場所を交換するんです。



golden city

ビルの窓辺、監視カメラの上、美術館の塀の上など、都内の片隅に潜む12体の「黄金のネズミ」。「ロケーションが面白い」「なるべく長く残る」「誰でも見られる」ことを基準に、建物のオーナーとの話し合いで設置場所を決めた。不動産と通貨と金とアート、それぞれの価値を長期的な視点で競争させていくゲーム的性格を持った作品。

高須 東京の地価が高いから、成立するプロジェクトだよね。

松下 相場の変動や、ものを巡る価値観の変化をテーマにした作品です。ネズミに貼られた金もそうだし、アート作品も、それを置く土地の価値も日々変化しているじゃないですか。オーナーには街に置いた作品をなるべく外さないようお願いしているんですが、これもグラフィティ同様、街に残る作品と思っています。小さい彫刻だけど、塀の上とかちょっとしたところに置かれることで、コミカルな風景になるんです。

バズらず、小さくやり続ける“弱さ”が重要。

西広 僕は、《LEGAL SHUTTER TOKYO》というプロジェクトをやっています。スタートした2015年頃は、日本でシャッターに絵を描いている人を見る機会はほとんどなかったのですが、勝手に描いていると思われて、驚かれたこともありましたね。もともと地域とアーティストをつなぐことを目的にしているわけではないのですが、絵をきっかけに話ができて、他のシャッターに広がっていく動きもありました。

このプロジェクトで大事にしているのは、お店の立場だけとか、落書きを消してほしい人の立場だけなど一方的な視点に立たず、すべての立場を考慮すること。そうやってコミュニケーションを取り、ルールに従って進める方がいいはず。その上でわかることもあるので、とりあえず実践してみることに重きを置いています。



LEGAL SHUTTER TOKYO

世界中を旅するグラフィティライターやアーティストへの合法的な壁画の窓口として2015年に始めたプロジェクト。イラストレーターやストリートアーティストの協力を得て、東京でも自由に描けるシャッターを徐々に増やしている。

UNGA from Broken Fingaz Crew
2017

松下 もともとある落書きを消して上書きするようなプロジェクトではないし、いろんなレイヤーの人を否定しないってことだね。アーティストに対してギャラが発生するようなシステムではない代わりに、アーティストは好きに描いていいっていうのも、ルールとして決まってるよね？

西広 そうそう、そこもユニークな点。看板ではないので、店の名前を入れるようなことはもちろんしないし、アーティストが自由に表現してくれた方が、結果的にもうまくいくんです。

高須 《LEGAL SHUTTER TOKYO》のような個人のできる範囲でやってる活動ってすごく少なかったんだけど、最近増えてきています。または SNS によってどんどん見えるようになってきたのかもしれない。企業や団体も、アートと関わる企画が増えてきてる気がします。だからこそ、小さくやり続けるというか、常に変化し続けられる余地を担保することが結構重要なのかなと思っていて。規模が大きくなり、関わる人やルールが増えると、最初の意図とは少しずつ、でも明らかに違ってきがち。だから、組織の“弱さ”みたいなものが逆に重要になってきていると、最近特に思います。

SIDE CORE アーティストユニット

SIDE CORE / Artist Unit



published_2023.01.25 / photo_tada / text_ikuko hyodo

役割を固定化させない関係性から生まれるもの。

高須 SIDE COREは、3人の役割をできるだけ固定しないようにしています。だから作品によって、中心になる人や手を動かす人が毎回違う。考えていることやこだわるポイントがお互いバラバラだから、変に組織化しないほうが自分たちには合っています。もちろん得手不得手はありますが、それも絶対視しない。そういう意味で、バランスがとれているような気がします。

松下 企業であれば、役割を明確にした方が仕事も回るだろうけど、誰がどの位置にいて、どの仕事をしていても基本的にいいと思っているし、それを実践できるのは面白いですね。

高須 あと制作の時は、結構みんなよくしゃべるよね。ああだこうだ話し合って、ひっくり返ることも珍しくないし、あまりまとまらないことの方が多い。話している時間はすごく長いと思います。

松下 たしかに打ち合わせは長い（笑）。

都市と地方を分けるのではなく、つなげるような作品を。

高須 建築にも同じことが言えると思うのですが、都市には規制やルールがたくさんあるので、作品を制作・展示するという面では、地方の方がのびのびしやすい気がします。

松下 都市と地方にはたしかに全然違う秩序が存在するんだけど、そもそもこのふたつを分けること自体が、問題だったりしますよね。都市を最適化するために、地方のリソースが利用されていたりするので。《rode work》を最初に出品したのは石巻の『Reborn-Art Festival』ですが、そういった都市と地方のつながりを表現した作品でもあるんです。

高須 なぜだか、都市と地方の違いについて質問される機会が多いんですけど、自分たちの中で特に分けて考えていないから、違和感が生じて、答えるのに考え込むことがあります。

松下 結局、地方で展示をしたとしても、都市と何らかのかたちでリンクするプロジェクトになる場合が多いですしね。青森で開催した、青函トンネルを題材にした展覧会『under pressure』では、道路インフラについて調べていくと、都市のシステムをつくるために道路交通網を整備していった近代化の歴史につながっていきました。

京丹後で4年ほどかけて行った《岬のサイクロプス》というプロジェクトでは、灯台をテーマにした作品シリーズを手がけていて。ただしこれも日本は海に囲まれていて、海沿いの地域ならどこにでも灯台はあるという意味で、その場所以外でも理解できる作品だと思います。また京丹後には軍事目的で「X バンドレーダー」と呼ばれるレーダーが置かれており、日本にはふたつのみ設置されているのですが、これを見ても東京と京丹後は密接な関係にあるのがわかります。

高須 都市と地方の違いは、限りなくグラデーションですからね。

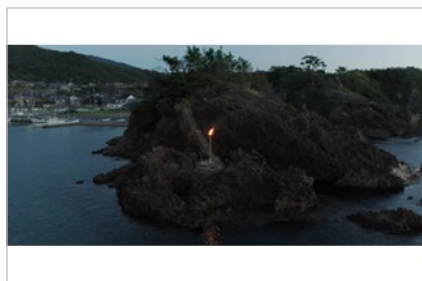


under pressure

国際芸術センター青森で2021年に開催された、SIDE COREによるEVERYDAY HOLIDAY SQUADの個展。青函トンネルに関するトンネルの斜坑や24年に及んだ工事が現在に残した土砂埋立地などをリサーチ。大量に海に放出され続けているトンネルの湧き水に注目し、「土木工事と環境の循環」をキーワードに作品を制作した。

提供：青森国際芸術センター

撮影：表恒匡



岬のサイクロプス

全国で数が減りつつある灯台をテーマにした連作。もともとは軍事拠点である灯台を巨大な「目」に見立てたり、丹後半島の灯台の跡地に常夜灯を灯す映像作品を制作。京都の各地域を舞台に、2021年に開催された『ALTERNATIVE KYOTO—もうひとつの京都—想像力という〈資本〉』で発表。



published_2023.01.25 / photo_tada / text_ikuko hyodo

求められるのは、精神的な耐久性のある建物。

高須 六本木ヒルズで開催中の『六本木クロッシング 2022 展：往来オーライ!』に参加していますが、搬入の時にバックヤードを通ってあらためて気づいたのが、六本木ヒルズができてもう 20 年近く経っていること。今は虎ノ門ヒルズとか表参道ヒルズもあるけど、「ヒルズ」という響きが六本木を象徴していた時代がありましたよね。今もヒルズと言えば、私は六本木が浮かびます。高層ビルの曲線デザインも六本木ヒルズがはしりでしたし、ああいう曲線そのものが未来のイメージと結びついていたはずなのに、今見るとそうでもなく感じることに驚きました。曲線を使った柔らかい形のビルが増えたのかもしれない。

西広 この 20 年間で自分たちがアップデートされて、情報が新しくなっているから、そう感じるんでしょうね。例えば神田とかにある古い雑居ビルだって、建設当時は新しかったわけだし。

高須 というか、ヨーロッパの様式を真似た明治時代の建物と曲線の高層ビルは全然違って、建築の歴史の中で、ある意味、突然出てきた形なわけじゃないですか。

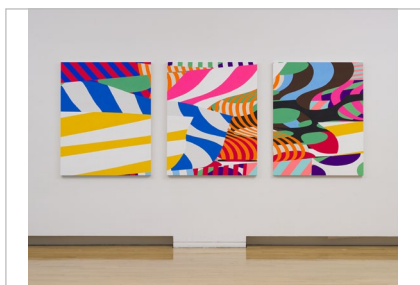
松下 たしかにコンピューターのテクノロジーを駆使して設計されたビルって、未来の建物というイメージをずっと持っていたけど、そのイメージ自体も変化することを体現しているのだと思う。都市開発は未来をつくっていくことでもあるけれど、それすらある時点から急に古くなって、過去に変わってしまう。本当の意味で残すことのできる未来を設計できていないというのは、日本の都市開発全般に関して思うことだったりしますね。

高須 知人の建築事務所に、ヨーロッパからのインターン希望者が殺到するらしいんですけど、その理由のひとつとして、日本の建物はスクラップ&ビルドを前提に建てられているから、新築のチャンスが多く、練習場みたいになっているんです。そういう話を聞いても、残すということの観点がそもそも違うんだろうなと感じます。工事もずっと続けし、東京の風景ってそれらでできているんだと思う。

松下 仮に建物が物理的な耐久性を持っていたとしても、時間が経って価値や意味が変わることによる、精神的な耐久性まで考慮されているものは少ないと思います。建物が完成した時点でつくられたイデオロギーに固執し続ける必要はないと思うけど、そこで示された都市のヴィジョンは共感し続けられる方がいい。だからどんな開発もいつかは過去になってしまうことを踏まえて、都市開発のビジョンを示していく必要があるのかもしれないですね。

変化の瞬間を積み重ねる日常。

松下 六本木アートナイトには、僕たちも参加させてもらったことがあります。このイベントも結構長いことやっていますよね。だからいい加減ネタは出尽くしただろうなと、正直思っていたんです。だけど去年、六本木交差点の高速道路の橋桁をカラフルな絵で覆った、今井俊介さんの作品が気になっていて、こんな許可取れたんだって事例がまだまだ出てきているんですよ。さっきの建築物の話みたいにある程度、恒久的に残す前提だと、いろんな制約があって難しいだろうけど、瞬間的にだったら普通の都市のルールを超えることも可能になる。それが、アートナイトの面白さだと思うんです。



UNTITLED

絵画の基本的要素である、色、形、空間についての考察をもとに制作を行うアーティスト、今井俊介による作品。

『六本木アートナイト2022』では、六本木交差点上を走る高速道路の橋脚に展示された。

今井俊介《untitled》2017年

高須 その瞬間だけ許されるのが、祭りの醍醐味だからね。

松下 その考えを発展させて、祭りとは捉えず、かといって長期的なビジョンで残すことも考えず、瞬間的に変化し続けることができれば面白いんじゃないかな。アートナイトでやっているような瞬間的な変化が、2週間くらいのタームで街に立ち現れては消えていく。それを祝祭ではなく、日常的にできたらいいですよ。

西広 ワタリウム美術館がキュレーションした『水の波紋展 2021』に参加した時は、展示した場所が空き地のような都市空間の隙間ですごく面白かったですね。空いたビルを使うプロジェクトは、これまでもたくさんあったけど、普通であればアートの舞台にならないような場所で何かやってみたい。「ここでアート作品をつくってください」っていうのが、ある種フォーマット化されて街おこしみたいになっているから、フォーマット化されていない場所を見つけたいんですよ。



水の波紋展2021 消えゆく風景から ― 新たなランドスケープ

変容する“都市の姿”に着目し、ワタリウムが位置する東京・青山周辺の27箇所に現代美術作品を展示。1995年、ワタリウム美術館とキュレーターのヤン・フォートとの協働により企画された『水の波紋95』展から26年ぶりの開催となった展覧会。SIDE COREは同展覧会内で《地球 神宮前 空き地》というグループ展を開催した。

提供:水の波紋展2021

撮影:後藤秀一

松下 そういう意味では、高速道路を歩いてみたい。飯倉 IC から高樹町 IC くらいまで。車を運転していると、一瞬しか風景が見えないじゃないですか。そんなことで日本の物流を止めていいのかは謎だけど（笑）。

西広 高速道路を歩ける日っていうのが、1年に1日だけあってもいいかもしれない。

高須 川下り的な感じで“道路下り”したいよね。ビル視点からだと高すぎて臨場感がないし、普段よりちょっとだけ高いところから街を眺めてみたい。

松下 それができたら絶対楽しいよね。

撮影場所：『六本木クロッシング 2022 展：往来オーライ!』（会場：森美術館、会期：2022年12月1日～2023年3月26日）

取材を終えて

ストリートカルチャーが重要なモチーフとなっている SIDE CORE には、「都市」のイメージがありましたが、当のご本人たちは都市と地方を分けておらず、「街」をより多層的に捉えているのが印象的でした。そうした視点を持ち得るのは、作品やプロジェクトが形になる前の、その土地に対する綿密なリサーチがあるからこそ。普段から話し合っている時間が長い、という3人。役割分担を決めず、自由に意見を交わすことで、思わぬ疑問やアイデアが生まれる過程も、取材を通して目の当たりにすることができました。（text_ikuko hyodo）